

आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館/京都府宇治市槇島町千足80

❖❖❖ 節電と自律人 ❖❖❖

京都文教大学図書館長

現代社会学科・教授(経営学・組織論) 渡辺 峻

もうだいふ前のことである。某大学に非常勤に出向いた時のことである。季節外れに気温が高く、講義室内もいささか不快であった。講義中は我慢をしたものの、講義の終了後に事務室に行き、「少し暑いのですが、エアコンは使用できないのでしょうか」と聞いてみた。なんと次のような回答があった。「どうぞ、いつでも講義室のスイッチをオンにして下されば使用できます。夏でも寒ければ暖房に、冬でも暑ければ冷房に下されば結構です。講義室のエアコンの温度は、学生と相談して先生が決めて下さい」。室内が暑いのか寒いのかを判断するのは現場であり、また何度が適温であるのか、それもまた講義室を使用する現場の教員や学生が決めればよいことであり、事務室では判断できない、と言うのである。もっとも「お部屋を出る時は、オフして下さいね」と念を押されたが、「もちろん、了解です」と返事をした。

この大学では、教員・学生は信頼の対象として扱われており、監視の対象ではないようだ。事務室の対応にまで、この大学の建学精神である「自

治自立人の育成」が貫徹しており、「自由と自己責任」の組織風土が実に爽やかであった。

ところで、過日、学内の某会議にて類似のやり取りがあった。ある席から「エアコンの設定温度を28度と画一的に管理されては、たまらない。大規模な講義室なのだから最初の数分間は26度ぐらいで冷やし、その後で28度にしたい。講義室の温度管理は現場に任せるべきである」という趣旨の発言があった。それに対して他方の席から規則と画一性を重視する趣旨の意見が出され、結局、ウヤムヤのうちにこのテーマは処理されてしまった。そのやり取りを聞いて発言衝動に駆られたが禁欲し、前述の某大学の事例を思い出した。

たかが講義室のエアコンの扱いについても、組織管理の全体目的から出発するのか、それとも某大学のように個人の欲求・動機から出発するのか、この差異は経営学的に言えば、古典的組織論か、現代組織論かの差異である。講義室の温度は、太陽の当たる南側の部屋か否かでは大きく異なるし、また部屋の規模の大小でも大きく異なる。また講義開始時と終了間際でも大きく異なるが、そ

これらの多様性を無視し、また個人の欲求・動機を無視し、画一的に温度を決めて、規則の為に規則を守り一律に管理するのは古典的組織論の典型である。それに比して、某大学のように、たかがエアコンの温度管理についても、現場の判断を信頼し、現場の「自由と自己責任」に委ねるのは、現代組織論の典型である。

このような大学の組織運営の相違は、そこでの構成員を自律人として育成するのか、他律人として育成するのか、はたまたモチベーションの高い

人材を輩出するのか、モチベーションの低い人材を輩出するのか、その分岐点を意味している。いま雇用の流動化の進展する中で、大学には自律型人材の育成が期待されているが、大学の人材育成メカニズムは、教員と学生との狭い人間関係内ではなくて、大学全体の組織風土の在り方に関わる問題であろう。もはや経験と勘で組織運営をする時代は終わった、と言うしかない。

(わたなべ たかし)

にぎわいの場としての図書館

現代社会学科・教授(政治学) 依田 博

ゼミの延長だろうか数人が熱心に議論している。額を寄せ合ってPCで何かを調べている、あるいはグラフやスライドを作成しているのかもしれない。予習をしているのだろうか向かい合わせに座ってノートを見ながらしきりに何かを確認している。画面をみながら声をひそめて盛り上がっているのはゲームでもしているのだろうか。

いずれも、最近のいくつかの大学図書館ではあたりまえの風景である。さらに、それらは「禁止」事項ではなく、さすがに大騒ぎと飲食はできないが、図書館に公認されている。というよりもむしろ、図書館がそのような空間を用意しているのである。これまでは、図書館ほど「静寂」という言葉がふさわしい場所はなく、ましてや「にぎわい」、冒頭の風景など無縁であった。学生のおしゃべりで静かさが打ち破られることに図書館側は頭を悩まし続けてきた。しかし、上記の風景は、図書館側があきらめた結果というのではなく、大学

における学習スタイルの変化がそれをもたらしたのである。

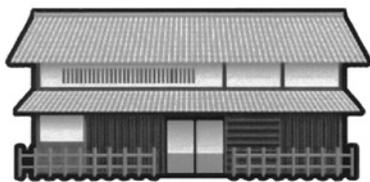
大学教育で今はやりの「アクティブ・ラーニング」は、かつての大学では当たり前で、わざわざ大学教育の基本方針とするまでもなかった。授業などで大学教員から受ける知的刺激は、あくまでも学生が勉強するためのキッカケや学習途中でのヒントでしかない。人文社会科学系の学生の勉強は、自分で本などの紙媒体の文献資料に目を通すことが中心であり、誰に言われるのでもなく基本的には独りで行うので図書館を利用することは当然であり、ゼミは、各自が磨いてきた知性をぶつけ合う「バトル」の場であった。

ところが、学習に対して能動的でない学生の増加と反比例するように、図書館では、利用者が激減した。それに追い打ちをかけたのがインターネットの普及である。今や図書館の必要を感じない学生の増加だけではなく、図書館に頼らなくと

で活躍した旧家があるが「森家」のように手が加えられることなく残っているのは珍しく、当時の様子をうかがうことができる。しかし北前船の衰退とともに各家の存続も難しくなり、時代とともに洋館に改築されたりしていったようである。

「森家」も家屋を売って東京へ移り住んだのであるが、この地に工場を建てた倉敷紡績の社長で大原美術館を設立した人物である大原孫三郎（1880-1943）がこの家を購入し、自らの宿舎並びに迎賓館として、一切改築せずそのままの形で使用したのである。古くなれば使いにくい箇所も出てくるであろうが、廊下の板の組み合わせ、縁側のガラス戸、畳と襖の日本家屋、ひとつひとつ貴重な品々であった。時代の流れの中で手が加わることなく当時のまま残っているのは、その重要性を理解し、守ろうとする大きな力があったからこそ今に伝えられている。そう思うととても考え深い。

一方、今私の住んでいる京都・伏見の界限は、昨年大河ドラマ「龍馬伝」の舞台になり、急に街中に標識がふえた。私の住むマンション裏地は伏見奉行所跡である。明治維新の折りに鳥羽・伏見の戦いで幕府軍がここに陣を構え、対する官軍の陣地は御香宮神社であったと聞く。少し歩けば名所旧跡に行きつく京都である。私は高校時代に使った日本史の教科書と年表を常に手の届くところに置いて、時間を見つけては歴史とオーバーラップさせながら散策することを楽しんでいる。長きにわたり都が置かれ歴史の表舞台であった京



都は、いろいろな伝統を守りながら今日に至っている。しかし、伝統を守りながらもその中で新しい時代に合うように少しずつ変化をしてきたのも京都である。祇園祭に見られるように、昔からのものをそのまま受け継ぐのではなく、マンションの立ち並ぶ街中で、新しい時代にあうように工夫がなされ次の世代へと伝えられていく。古いものを守りつづけるには全部否定するのではなく、古いものを理解し、その中から改善を試み、大きく発展しつづけていく。これが、京都の魅力となっているのだと思う。

論語の「子曰、温故而知新、可以為師矣」という教えが頭をよぎる。「故きを温^{ふる}ねて新^{たず}しきを知れば、…」そのとおりである。先人の教えには頭が下がる。

古くてもその良い所を認めながら時代にあった変化を遂げていく京都に暮して、京都の文化や歴史を学び返している。一昨年、郷土資料館で自分の氏と越中の十村制度という小さな歴史との関わりについて知る機会があり、更に郷土の歴史や文化に興味を抱くようになった。

京都文教短期大学も創立から50周年が経ち、昨年『自校史を学ぶ』が編纂され、新たな時代に入ろうとしている。古いものを打ち壊すのではなく、伝統を守りながらそれを基礎に新しく伸びていかねばならない。本学の建学者たちの精神を受け継ぎ、今様に思考することが求められていると思う。その中でいろいろな歴史の中の史実を知り、しかし過去に捕われることなく、また昔を否定するのではなく、先人たちの築き上げた文化や伝統を知り、次の世代へと私自身も時代に合わせ新たに変化していきたいと考えている。

（たかやす じゅんこ）

***** 私のすすめる3冊 *****

幼児教育学科・准教授(体育・健康とスポーツⅡ) 山岡憲二

1. 『徳川家康』

山岡荘八 著／講談社

文庫本26巻、歴史書やデータを参照し、聞き取り調査等を行い、徳川家康の一生涯をまとめた著書である。家康は若き頃桶狭間の戦いで敗れた経験を踏まえて、以後の戦いには敗れたことはなかった。家康は天下泰平を強く望み、徳川家の主として家臣等を掌握し指導者としての才能を遺憾なく発揮した。日常生活においても質素儉約に励み体をいとい、健康に気をつけていた。戦術、作戦を緻密に立て武将としての資質を備えた人である。スポーツ選手は過去の歴史から戦術を勉強するのに良い本である。

2. 『スポーツと眼』

石垣尚男 著／大修館書店

近年スポーツの世界では視機能の重要性が指摘されてきた。情報の80～90%は眼から入るといわれている。眼は情報の受け入れ口であり、放出口でもある。現在のスポーツ科学は、パワーや持久力などの体力要素、集中力などの精神的要素を解明し、それを強化しようという、いわば出力側が中心であったが、眼も重要な要素として注目されるようになってきた。スポーツ選手、一般の人も眼からの色々な情報を瞬時に判断し、体に伝達できるようになっていただきたいと思う。わかりやすく説明されているので一度読んでいただきたい。

3. 『信は力なり－可能性の限界に挑む』

山口良治 著／旬報社

山口先生は大学の先輩であり、旧全日本のラグーマンであった。伏見工業高校に体育教員として赴任され生徒達にラグビーの指導をされてきた。当初は色々苦勞されたが全国制覇もなされた。ラグビーは15人で戦うスポーツである。一人はみんなのため、みんなは一人のために頑張ることを指導されている。又、ラグビーは試合終了と同時に選手達は仲間であり相手を褒め称え、頑張ったことをお互い喜び合う。自分を信じ、仲間を信じることで絆で結ばれ、お互いが頑張れることになる。自分の可能性を信じて前進することを教えられた。

(やまおか けんじ)

●●●●●●●●●● 選書ツアーに参加して ●●●●●●●●●●

幼児教育学科2回生 谷口 紹子

図書館から選書ツアー参加へのお誘いをいただいた。その時は何の情報も持っておらず、「何それ?」と思い、参加しますと答えたものの1人では心細かったため、友人を誘って一緒に行くことにした。友人と一緒に選書ツアーの説明を聞き、大まかなことは理解したものの、学校や生徒のために本を選ぶということは初体験だったため内容のしっかりしたものを選びなければならないなと思いつつ当日を迎えた。

私は本を読むのが好きで多くの本を購入しているが、それは全て自分の趣味や興味によって購入してきた。それはつまり、「自分のため」という事である。しかし今回の選書ツアーで選ぶ本は後々短大の図書館に置かれ、自分以外の人も目を通すことになる。という事は、自分ひとりが興味を持っただけで選出しては意味がなく、自分も他の人も興味を持つものでなかつ、役に立つ本を選びなければならない。このことに気付いたのは参加しますと答えた後だったため、今さら断ることも出来ず、どうしようかと結構悩んだ。私が「これはいいぞ」と思って選書したところで、他の人が同じことを思ってくれるとは思わない。しかし、参加する以上、図書館を利用する全ての人に役に立つ本を選びたいと思った。結果、私の選書方法の基本は私がこの学校で過ごしてきた中で、必要と感じていたものを選ぶということになった。まず、私は英語の授業で英語の絵本を和訳して英語で読み聞かせをしようというものがあったが、その時に自分の理解できる範囲の英単語があり、まとめやすく読みやすいものが図書館には少なかったため、読みやすく和訳しやすいものを自分で選書した。これで微力だが後輩の役に

立てたのではないかと感じている。次に、この学校にはよく英検やワード・エクセルの検定、秘書検定やマナー講座など様々な検定・講座のお知らせがあり、受験する人も多くいる。その中で、テストの過去問やパソコンのやり方が載っていると参考にしやすいのではないかと感じたため、2010年の過去問を中心に英検やパソコン関係のものを選書した。選書ツアーには、食物栄養コースの人も参加していたので、私と友人は幼児教育学科として参加しているのだから、その授業などで必要なものを選ぶということになり、選書の8割は幼児教育学科で使えるものを選んだ。幼児教育学科の授業はグループワークやプレゼンテーション、製作などの授業が比較的多いため、製作しやすいオモチャが載っている本や折り紙製作で使える本、定番の絵本などを選書し、更にプレゼンテーションで資料になり得る幼児の特徴が載っている本なども選んだ。また、実習時に書かなければいけない実習簿や指導案の書き方やヒントが載っている本も年齢別に選書した。これらの本をどんどん活用し、知識として蓄え、現場で使ってもらったら嬉しい。

今回初めて選書ツアーに参加させていただき、選書をし、選書がいかに重要であるか、それぞれの本が何を伝えようとしているのかが、参加する前より理解できたと思う。

(たにぐち しょうこ)

